

# 「京都」における「日本文化」の発見

—明治期外国人の京都観光と日本の伝統文化イメージの形成をめぐって—

田 中 ま り

欧米諸国で今日一般に知られている日本の主要都市といえば、まず東京そして京都であろう。しかしこの二つの都市は知名度こそ同じように高いものの、その位置づけは全くといっていいほど異なる。東京が日本の政治・経済の中枢部として世界のニュースに日常的に登場するのに対して、京都は国際会議の開催地となるような場合を除いて、ほとんど日々の話題に上ることはない。また東京は現代日本文化の発信地とみなされており、そこでの風俗・流行現象は日本の最新事情として注目されるが、京都は日本の伝統文化を保存する、ある種の博物館的な存在とされてしまっている。外国向けの観光ガイドを見ても、京都の見所の多くは古い神社仏閣、祇園祭など長く続いた祭礼や四季折々の伝統行事であり、特産品は西陣織をはじめとする伝統工芸品であると記されている。このようなガイドのなかには“Old Kyoto”などといったタイトルのものもあり、京都の中でも特に伝統色の濃い、欧米人がイメージするところの、いわゆる「日本文化」が体験できそうな場所を選んで紹介している。このようなことから欧米人にとって京都が日本の伝統文化の具現とみなされていることはもちろん、むしろ京都の印象が欧米人の日本文化イメージに大きな影響を与えてきたのではないかと推測される。

それどころか今や日本人にとってさえ、京都は伝統の町であり、失われた日本の美を代表する場所とされているのである。雑誌などで見られる京都の特集は、京都が日本の伝統文化を担う町であることを強調し、京都旅行によって伝統文化に触れることを推奨する。このようなイメージに支えられて、旅行のコースは日本の歴史や伝統文化を感じさせる古い寺社を巡り、古い町並みや古風な商店などで少々レトロな旅の情緒を味わうものとなり、先に述べた欧米人の京都旅行のコースと極めてよく似てくる。おそらく日本人の伝統文化イメージの形成にとっても京都のイメージは重要であるといえるであろう。

もちろん京都は初めから「伝統の町」であったわけではない。かつての京都は政治的にも文化的にも国の「都」として君臨し、そこでの風俗は決して伝統ではなくむしろ最先端であった。では京都はいつから「伝統の町」となったのであろうか。おそらくはすでに江戸期を通じて、徐々に京都の文化はその先端性を失い、平安期に由来する「伝統」や「権威」を担うようになってきていたと考えられる。さらに明治に入ってから東京遷都は、文化的先端性の喪失を決定的なものにし、それによる求心力の低下が文化的停滞を招いたであろう。しかしこれが京都の「伝統」を保護する大きな契機となったと思われる。というのもその停滞が幸いして、京都は東京がこうむったような急激な変化を体験しなかったと考えられるからである。その結果京都には古い町並みや伝統文化が数多く

遺されることとなった。

だがそのような歴史的経緯とは別に、京都に向けられた外国人旅行者の観察、つまり異文化の人々による「他者の視線」が日本の伝統文化イメージの形成に影響していた可能性があると思われる。幕末以来日本を訪れた外国人による数多くの日本滞在記・旅行記には様々な日本の風物が、ときに感動あるいは感嘆の言葉を伴って、ときには嫌悪を催すとしながらも事細かに描写されているが、彼らの目は常にヨーロッパには見られない日本の「珍しさ」に注がれている。そして彼らの多くは東京や横浜といった文明化された都市を実用的には便利であると認めてはいるものの、同時に急速に欧化された面白みのない場所ともみなしている。そこで彼らは本来の「エキゾチックな」日本を感じられる場所を、ヨーロッパ化された日本である東京や横浜以外の場所に求めるのである。

そのような場所の一つが京都であったと思われる。当時の外国人にとって「非ヨーロッパ的である」場所は、彼らの求める「エキゾチック」なものへの欲求を満たしていたのであり、それこそが京都の大きな魅力であった。一方日本人にとっては、そのような「日本的なもの」の多くはつい昨日まで当たり前の、ごくありふれた町並みや文化・習俗であったと思われる。つまりそれらは文明開化の時世にあってはむしろ忘れ去りたい過去の遺物であったともいえよう。美術界における日本美術軽視の例を見るまでもなく、当時の日本において「伝統」は古くさいものであり、重荷ですらあったと考えられる。しかし京都はそのような「伝統」が集積した町であった。先述したように京都も元来伝統的な面からのみ成り立っていたわけではない。明治期にあっては文明開化の時代の流れを受けて、新しいものを求める機運は京都にも存在していたであろう。しかし京都を訪れる人々、とくに外国人たちが求めていたのは「古い日本」であった。そしてこのような外国人たちの、何か自分たちと違うもの、非ヨーロッパ的なものを求める視線にさらされ続けることによって、京都では外国人との接触の場である「観光」シーンにおいて、外国人の求めるような「伝統」が作り上げられていったとも考えられないだろうか。さらにそのような「観光」の場で抽出された文化的要素は、日本人自身の伝統文化イメージにも重要な影響を及ぼした可能性がある。

そこで本稿では日本の伝統文化イメージの形成の一要因として、外国人の京都体験に注目した。明治期に日本を訪れた外国人が京都においてどのような体験をし、それをどのように記述・分析しているかに焦点を合わせることで、その後の日本の伝統文化のイメージを決定づけたのは何であったかを探る試みとしたい。なかでも明治の日本の文化・教育政策に何らかの影響を与えたと思われる外国の文化人や学者の観察は、日本人が自らの文化イメージを形成するにあたっても影響力を持った可能性がある。彼らがどのような観察記録・印象記述を残しているかを分析することで、日本の伝統文化がいかなるものとしてイメージされたか探ることができるのではないだろうか。

## 1 京都観光前史－明治期以前の京都

ではそもそも京都は日本人にとって、いかなる意味を持つ都市だったのだろうか。平安朝以来、京都は国の首都つまり「都」であり、さまざまな事件がそこで発生している。そしてそのような歴史的イベントは様々な脚色を経て、平家物語を初めとする各種の物語となって日本全国に流布していた。

中にはそれらの物語を語る芸能者自身が、物語の主人公たちの末裔をよそおう例もあったと言われている。その場合、そのように語ることで芸能者自身の出自ばかりでなく、その技芸も「都」によって権威付けられていたと思われる。つまり「都」は文化的な権威としての機能を担っていたと言える。したがって明治期以前の日本人にとって、京都はまず古の物語の舞台であり、政治的な重要性は薄れていたものの、文化・教養の中心、雅な高級文化の発祥の地として憧れの大都市であった。例えば江戸期の観光案内である「都名所図会」を見ると、主だった名所については図版がそえられ、当地の様子描写と並んで、その来歴である古い物語やそこで詠まれた和歌が紹介される。例えば音羽山清水寺の項は大和国の僧「延鎮」と将軍「坂上田村丸」が登場する縁起、伽藍の名前や本尊の解説、音羽山を詠んだ新古今集の和歌と続いている。当時の名所は歌枕的な意味合いが強かったことがうかがえよう。したがってそのような物語や和歌に恵まれない場所についてはごく簡単に触れられるにとどまる。現在では京都の観光スポットの中でもひととき特徴的な金閣寺も「応永四年に将軍義満公（鹿苑院殿なり）高閣をたて、花美をつくし、金箔をもって一面に装ひ、閣の前には池広くして、九山八海となづけ伝ふる奇石さまざまあり。金閣三重にして第一を法水院といふ（弥陀の三尊・夢想国師の像・鹿苑院殿道義の像あり）。第二を潮音洞といふ（自然木の観音・四天王を安ず）。第三を究竟頂といふ（後小松院勅額あり。板敷き三間四面一枚板。四壁の板ことごとく金箔を押す）」（「都名所図会 3」269 ページ）などと、由来や名称の解説が一通り行われているのみである。

一方鎖国政策下にあった江戸期に京都を訪れた外国人の例は非常に少なく、主に長崎において貿易を許されていたオランダの代表が公式に将軍を訪問する際に通過する場合に限られていた。したがって京都についての記述もケンペル一行やシーボルトなど数例の記録が知られている程度であろう。しかも彼らの行動の範囲は厳しく制限されていたため、自由な観光旅行とはほど遠い。しかしこのような限られた滞在においても幾つかの細かい観察がなされている。例えば1826年のオランダ商館長の江戸参府に同行したシーボルトの『江戸参府紀行』には、各地の緯度・経度、気候の科学的な記録が書き込まれ、天皇の世襲制、朝廷と幕府という二つの権威の関係などが説明されているばかりでなく、御所のたたずまいや貴族の服装、茶の湯体験や町の様子などが細かく観察されている。シーボルトがこの時に訪れたのは、公式訪問の必要があった京都所司代の城館をのぞけば、知恩院、祇園社、清水寺、高台寺などの寺院群、さらに豊国廟、三十三間堂などであるが、これらについては一般的な寺院建築の特徴を述べるにとどまり、個々にはほとんど記述はない。わずかに三十三間堂についての「この寺は太閤の建立した名利のひとつで、三三、三三三の仏像で有名である。本当にそれぐらいたくさんの像があり、一千は等身大であるが、中にはすごく大きなものがある。これらの仏像は、一〇体が前後に重なり長い列をなして立ち並び、列の中程に大きい像が立っている。この寺の裏で国中の名人が弓を射る習慣がある。的は六六間の距離にある」（シーボルト236 ページ）という記述にとどまる。シーボルトの観察は一般に記録的性格が強く、その観察を元にして日本文化全体の性格を論じようとするような傾向は少ない。京都の町についてもいかにも医学関係者らしく、まずその視線は生活水準や衛生環境に注がれており、その背後の日本の精神文化や文化

## 田 中 ま り

的文脈にはほとんど関心が払われていないようである。このことから、この時期の日本は単に冷静な地誌学・博物学的観察の対象であり、まだその観察に基づく分析・解釈はなされていなかったことがうかがわれよう。

しかし幕末になると状況は異なってくる。国交を求める外圧は一層強まり、アメリカのペリーが開国を求めて浦賀に上陸したのを初めとして欧米諸国は次々に外交使節を派遣してきた。これら諸外国との対応を巡って旧弊な幕藩体制は遅れをとり、それが国内の政治的変革の引き金の一つとなる。それまで徳川幕府の政治的権威を保証する方便に利用されてきた天皇制にも、そのそもそもの正統性ゆえに実際の政治機能を担う可能性が生じてきたのである。その意味で天皇の御所がある京都は政治的な台風の日として、にわかにアクチュアルな意味を持つに至った。この時期に京都を訪れた外国人の記録として特に注目されるのはイギリスの外交官であったアーネスト・サトウとアルジャーノン・ミットフォードのものである。サトウは二十年以上にわたる日本滞在をとおして江戸から明治への変化をつぶさに観察・記録した日記を元に、1921年に時代の日撃証言として当時の状況をまとめている。一方ミットフォードは幕末期における滞在は三年余りであったが、三十年余後に再度日本を訪れている。幕末期の滞在直後の1871年にも、当時日本で遭遇した事件や収集した民話をまとめ『昔の日本の話』*Tales of Old Japan*と題して出版しており、明治初期に日本を訪れた外国人にとっての代表的な日本紹介の書の一つとなっていた。さらに彼は日本再訪の折に見聞記を発表しているだけでなく、後に書いた自らの回想録のなかでもかつての日本体験をまとめ直している。以下で引用する彼の記述は後の回想録からのものであり、したがって幕末期の日本の状況ばかりでなく対比の形で明治期の日本の姿も現れている。それに関しては後に再度詳述したい。

ミットフォードは大政奉還とそれに続く鳥羽・伏見の戦いの直後である1868年三月に京都を訪れているが、当時の京都は外国人にとってまだ決して安全な場所とは言えなかった。ミットフォードより数年前に、まだ幕府の権威が残っていた時期の日本を訪れたイギリス公使オールコックの場合、海路で訪れた大阪では芝居を楽しむこともできたが、京都へ入るのは治安上の理由から断念せざるを得なかったらしい。もっともオールコック自身は幕府側の述べるところの治安上の不安を疑問視しており、日本のもう一つの政権である朝廷との交渉を妨げるのが目的で、実際には治安に問題はないのではないかとも推論している。しかしこの時期の京都は外国との交渉を拒む攘夷派勢力によって非常に不穏な状況にあり、幕府側の説明はあながち虚偽でもなかったであろう。大政奉還後も外国人に対しては根強い反発があり、事実ミットフォードとサトウはパークス公使とともに御所に向かう途上、攘夷派浪人の襲撃を受けている。そのような危険にもかかわらず、京都という古い都市についての彼らの関心は当初からかなり高かったらしく、ミットフォードも「今でこそ京都はその神秘のヴェールを脱ぎ捨ててから久しく、観光客に親しまれているが、当時は我々外国人にとっては有名ではあったが、目新しかったのである」（ミットフォード 146ページ）と回想している。ここで「今」といわれているのはミットフォードが回想録を書いていた20世紀初頭のことであろう。続く祇園の茶屋での宴席体験に関する記述からは、かつての京都が「今」とは異なる雰囲気であり「今の気取った世の中では、もうこの種の宴会はできないのではないかと考えている」（ミッ

トフォード 147ページ) と述べていることからして、ミットフォードはかつての雰囲気の方を懐かしんでいるらしいことがわかる。続く「若い芸妓たちが客の間に坐ろうとした時、私は自分が恐ろしい者のように思われているのをはっきりと感じた。見慣れない獣とでも思って驚いたのか、誰も私のそばに来ようとしなかった。しかし、最後に、中でも一番の美人が勇を鼓して私のそばに坐った。彼女は最初のうち、恥ずかしそうでなんとなく粗野に見えたが、しばらくするうちに私の手から食べ物をもらう小さな羚羊のように、非常に素直になった」(ミットフォード 147ページ) という部分は一種の異文化接触の場面であり、芸奴たちが初めての外国人への対応の仕方がわからず戸惑っていることがうかがえる。この時期には異なる文化背景を持つ外国人をもてなす「観光」空間はまだ誕生していなかったもといえるであろう。

ミットフォードは翌日清水寺を訪れるが、そこでなにより彼を感動させているのは寺そのものではなく、御所の眺めであり、「ほんの三ヶ月前、ここに来ていたら、容赦なく切り捨てられただろうという感慨」(ミットフォード 149ページ) であった。後述するように、ミットフォードはその後の「御所」について、どんな観光案内にも載っているが、かつての魅力は失われており、すでに旅行者の注意を引くような眺めではなくなっていると述べている。「御所」の魅力は建物そのものに由来するものではなく、そこが神秘的な権威をもつ天皇の住居として実際に使用されていることからくる特別な雰囲気にあったとミットフォードは強調するのである。さらに彼は二十日ほど後にパークス公使に随行して「御所」に足を踏みいれているが、この特別な場所は当時のミットフォードの目に「天子さまの宮殿は＜東洋的な華麗さ＞という言葉がよく使われるように、外観を派手に飾り立てることの好きな普通の東洋の有力者の屋敷と違って、気高く簡素な造りが特徴である。…それは不自然なほど簡素であったが、御所はそれ自体がもつある威厳を備えていた。場所の節約は常に見すばらしい結果を生むものだが、ここではそれが全くなかった。中庭は広々として美しい白砂が細心の注意をもって整然と敷き詰めてあった。建物は普通の形だったが、全く飾りがなく、大きく広々として威厳に満ち、それが大きい特徴になっていた。」(ミットフォード 172ページ以下) と映っていた。

ミットフォードにかぎらず、その後日本を訪れた外国人の多くは、日本家屋における家具調度の少なさに注目している。それを貧しさの現れととる場合も精神主義や合理性として賞賛する場合もあるが、十九世紀以降の大衆消費社会によってさまざまなモノの氾濫を体験しつつあった欧米人から見れば、非常に特異な態度と見られたようである。しかしこのような日本の住居空間の状況は、当時の生産力の低さに加えて、「間」を重視する伝統的な美意識や畳の上の生活様式、住居の構造などさまざまな要素が重なりあって偶然に生み出されたものであり、「伝統」が軽視されるにつれて急速に姿を変えることとなる。日本家屋の簡素さを高く評価していた人々にとっては、当然その変化は好ましくなかったであろう。今日でもなお簡素なかつての日本家屋への賞賛と、現在の混沌とした建築・生活様式への批判が多くの外国人から聞かれるほどである。

ところでこの京都訪問に際してミットフォードの一行は知恩院を宿泊所としている。外国人が訪れること自体が稀であった当時は、もちろん外国人が宿泊できる施設など存在していなかった。多

くの場合は寺が用いられたようである。しかし「我々が快適にすごせるように、あらゆる手段を講じてあり、・・部屋は全く壮麗そのもので念入りな作法によって数多くの珍味が供応されたが、それは日本のルクルスともいうべき偉大な足利義政公でさえも満足させたであろう」(ミットフォード 156ページ)と書かれているように待遇そのものは悪くなかったらしい。

このように明治期以前の京都は、わずかに外交上の目的をもった使節のみが訪れることを許される場所であり、多くの外国人にとって興味を引いていたものの近付き難い場所であった。その近付きにくさこそが、当時の京都の魅力であったともいえる。というのは京都がそれまで外国人の訪問を拒み、外国文化から隔絶した場所であったために、ヨーロッパの文化とは全く異なる発達をとげた日本文化の最も「純粋な」姿を見られるのではないかと期待されていたふしがあるためである。つまり京都は神秘的な国・日本の、さらに神秘の中心にあったのである。もちろん異なる文化的背景を持つ外来者との交流をするための余地、つまり「観光」化された空間もまだ存在していない。この時期に京都を訪れた外国人は、自分が見るものについてある程度の知識を蓄えている観光客ではなく、未知の国に惹かれてやってきた探検者であり、本来の意味における「旅行者」であったといえるであろう。

## 2 明治前期の京都観光

明治時代にはいると京都は大きな変化をこうむる。新政府は東京にすべての政府の機能を集中させることで東京と京都の差を際立たせ、京都が都であった過去を払拭し、国民全体に首都としての東京を強く印象づけようとした。東京の権威を高めようとすればするほど、相対的に京都の地位は低くなる。事実この時期、京都は単なる一地方都市へと変貌しつつあった。明治十二年(1879)に京都を訪れた医師のエルヴィン・ベルツはその様子を「かつて、天皇が将軍たちにより言わば押し込められたような形になるまでは、帝都であった京都も、いささか落ち目の模様を呈している。東京に比べて京都の格を下げるため、現政府はあらん限りの手を盡している。以前は百万の人口を算したこともあるそうだが、今日では二十三萬にすぎない。市街は東京よりも規則正しくできていて、一般に東京よりも美しいようだ」(ベルツ第一部上巻74ページ)と述べている。それでも明治十年(1877)には大阪―京都間に鉄道が開通、明治二十二年(1889)には東海道線が営業を始めるに及んで国内の移動は格段に容易になった。短い期日のうちに旅行を楽しめるようになった結果、日本国内の旅行者数は増加し、仕事や学業のために移動することもそれほど珍しいことではなくなったのである。

しかしこの時期に京都を訪れた外国人は、短期滞在の旅行者というより、一定期間日本に滞在していたケースが多かったように思われる。彼らのほとんどは外交官として日本に赴任していたり、医学や自然科学方面の専門家として招かれたり、あるいは語学教師として日本の学校に雇われたりと、日本において何らかの職をもった人々であった。純粋に旅行者といえるような外国人客の数はまだ限られていたのである。明治十年代に京都を訪れ、その記録を残している主な外国人としては、先に述べたアーネスト・サトウ、エルヴィン・ベルツ、博物学者のエドワード・モース、フランス

士官で作家でもあったピエール・ロチ、言語学者のバジル・ホール・チェンバレンなどが挙げられる。彼らは長短の差はあるが日本に滞在し、多くの場合短い旅程で京都を訪問している。彼らの記述を比較すると、京都のイメージが日本の伝統を巡って固定化し、それとともに観光にも一定のコースが形づくられるプロセスがおぼろげながら推測される。

ベルツは京都に一週間滞在したはずであるが、彼が書き残しているのはもっぱらプロイセンの王子の訪問に敬意を表して特別に披露されていた祇園祭の山鉦についてで、「神様の車は、東京では毎年即製され『ダシ』と称せられるが、京都では古くて厳めしい巨大な二輪車で、その上に家のようなものが作ってある。壁は、とても高価な日本、支那、ヨーロッパ産の刺繍から出来ている」（ベルツ第一部上巻74ページ）という文に続けて山鉦の人形や飾り幕の由来が詳しく説明されている。ベルツは以後も患者の診察のために京都を訪れたようであるが、その際に京都見物をしたとの記述はない。しかし後年の奈良旅行では、仏像にも建物にも深い感銘を受け、かなり詳細に書き残している。

アーネスト・サトウの京都についての記述は1879年の旅行の際のものである。このときは海路伊勢から南紀を回り、列車で大阪から京都に入っている。サトウは先述したように幕末期にも京都を訪れているが、その時の日記をもとに1921年に書いた回想録には政治的な事件の経緯と多忙だったことが記されているばかりで、京都のたたずまいについてはほとんど触れられていない。しかし後年の京都旅行では、観光のあらましを簡潔ながらまとめている。それによれば彼は西本願寺、興正寺、本圀寺を見物した後、京都にあるいくつかの窯元を回ったとのことである。日本の重要な輸出品の一つである焼物にはかなり関心があったらしく、清水焼、栗田焼、楽焼など様々な窯元を訪れ、職人にも話を聞いている。さらに現在の京都国立博物館の準備室とみられる「博物館事務所」にも足を運んで所蔵品を調べ、黄檗山万福寺、宇治の平等院を経て奈良、大阪の社寺を回り京都に戻ったようである。さらに数日をかけて東福寺、南禅寺、永観堂、黒谷、真如堂、吉田、銀閣寺、修学院離宮など京都の東側の名所、北野天神、平野、金閣寺、等持院、御室、太秦、嵯峨の清涼寺、天竜寺、嵐山など西側の名所と、ほぼ京都全域を精力的に回っている。しかしこれらの寺院についての個別の記録はなく、サトウがどのような感想を持ったのかは明らかではない。ただこのような観光の日程をぬって表千家の茶席に出席したり、浄土宗の教義を聞いたりする機会を持っていることからみて、日本文化への理解を深めようとしていたのは確かであろう。事実帰国後のサトウは日本を紹介する多くの論文を書いているが、そのテーマは旅行案内書から、歴史・地理的な概観、民俗的風習や日本人の宗教観、技術の伝播や日本語の言語上の問題など多岐にわたり、彼の感心がかなり広がったことがうかがえる。

もともとは自然博物学者であったモースも、日本の骨董や焼物には多大な関心を寄せた。彼はさらに日本の工芸全般、土木・建築技術にも興味を示し、自らの観察を『日本の住いとその周辺』という著書にまとめている。モースが京都に立ち寄ったのは1882年の西日本旅行の際で、この旅行自体アメリカの博物館のために様々な日本の骨董品を集める目的で行われたらしい。興味深いことにこの旅行には後に東洋美術を研究・紹介することになるフェノロサが助手のような形で同行してい

田 中 ま り

る。モースは道中の他の土地で行ったのと同様、京都でも旅館や周辺の民家の建築様式、工芸品の制作現場などについて挿絵を交えて詳述しているが、京都のいわゆる名所にはほとんど触れていない。わずかに南禅寺の小堀遠州の庭についての感想が見られるが、これは当時の彼が茶道の興味をもっていたことに関連していると思われる。京都での目的は第一に京都周辺の焼物を蒐集することで、市内の描写が少ないのに比べて窯元の様子はかなり詳しい。

これらの、いわゆる名所を回るような観光らしい観光にあまり興味を示さない、あるいは一通りは見学するものの、特に細かい印象を記していない訪問者に比べて、この時期の京都について、もっとも詳しくもっとも鮮やかな、今日の我々が想像するところの「観光客らしい」印象記を残しているのはロチであろう。彼はすでにイスタンブールやタヒチでの自分の異文化体験をもとに小説を発表しており、フランスでは異国趣味の作家として知られていた。1885年の三月から十一月まで半年にわたる日本での滞在も『お菊さん』（1887）、『秋の日本』（1889）と題してまとめている。

ロチの京都の旅行印象記「聖なる都・京都」は「つい近年まで、それはヨーロッパ人には近寄れない神秘的な町だったが、今ではもう鉄道で行ける。それだけ平凡化して、箔が落ちて、底が見えたとも言へるだらう」（ロチ 1ページ）という文章で始まる。彼はアクセスが容易になったことで、かつて京都が持っていた隔絶した雰囲気失われ、観光化されていることを予測している。そしてそれはある面では的中しているといえよう。すでに京都には外国人観光客が快適に利用できる洋風の宿があり、また見所とされる場所もある程度固定化してきていたように思われるからである。例えばロチはサトウらと違って焼物に興味はなかったが、「私には大して興味もないことだが、あの、何百年も前から事業を続けてみて、数へきれないほど沢山の茶碗や花瓶を世に撒布した、陶磁器制作場も訪ねなくてはならない」（ロチ26ページ）と述べていることからして窯元へは行ったらしい。

しかし京都の寺院の多さはこの冷静なロチをも圧倒した。京都に到着するやいなや「しかもなんといふ廣大な宗教的な遺産だらう、なんといふ巨大な敬神の聖殿だらう、古い帝のこのキョートは！ あらゆる種類の神や女神や獣たちにささげられた無数の富の眠ってゐる三千の寺々」（ロチ 9ページ）と驚嘆の声をあげている。それでも日本人の宗教的対象となる仏像や神社に対するロチの目はかなり辛辣である。仏像を売る骨董屋街での「無気味な、意地悪さうな、嘲るやうな、又はグロテスクな神々や怪物などの数千の顔」（ロチ12ページ）という感想、異形の仏像を「化物」とする感性には、宗教観の違いと西洋中心的なロチの姿勢がはっきり現れているといえよう。

このようにロチの日本に対する感想には常に称賛と軽蔑が入り交じっている。例えば彼は西本願寺にある聚楽第の遺構についてかなりの紙幅を割いているが、その描写を見れば西欧の一般読者の異国趣味を満足させるであろう日本の建築や服装、芸術に絢爛たる形容詞を用いて最大限の賛辞をささげていることが分る。「ありとあらゆる驚嘆すべき壮麗さが壁や圓天井にある。高價な金泥は至る所に一様に誇示されて居り、さうしてこのビザンチン風のたたずまひの襖や壁面には、日本の偉大な世紀のあらゆる名匠たちが、眞似の出来ないものを描いたのである。・・天井も等しく金泥で塗られ、同じ丹念、同じ技法を以て描かれた格天井が嵌めてある。だが恐らく一番素晴らしいものがあるのは、あのすべての天井の周圍に在る連續した高い透彫の欄間である」（ロチ20ページ）



という部分に続いて、館の中の様子が延々と描写されるのである。しかしロチはその絢爛たる壮麗さの背後に存在するはずの日本人の精神文化には踏み込もうとはせず、優れた西洋文明に属する自分の理解を越えた異様なものと位置付け、軽蔑的な態度を決して崩そうとはしない。

ロチが訪れたのは、八坂の塔、清水寺、西本願寺、御所、祇園界限と思われる花街、廣方寺、北野天神、芝居小屋、三十三間堂である。その他にも多くの寺を訪れたようであるが、それらについては特に名前が記されていない。これらの地名は先に述べたサトウの旅行、後述するチェンバレンの記述にもかなり共通しており、外国人にとっての興味ある名所が絞られてきたことが推測される。またロチは旅の記念に仏具屋で金色の蓮を探したり、骨董屋で古い仏像を購入したりしているが、彼の買物はモースのような学術的な蒐集でも、他の多くの旅行者たちのように骨董的価値を求めている点でもなく、自分の記念になるもの、心の琴線に触れるものを買って求めている点で今日の「観光土産」の気分に近いものが感じられる。これらのことはこの時期の京都に「観光」が成立しつつあったことを示していると思われる。

ところで外国人にとっての名所がどこであったかを最終的に確認できるのは、日本を訪れる外国人旅行者の拠り所となった各種の日本案内記や日本紹介の著書であろう。中でも四十年にわたって日本に滞在し、日本各地を旅行した言語学者バジル・ホール・チェンバレンが、旅行案内書の出版で有名なマレー社から出した『日本案内記』（1891）は、日本に関心のある西洋人に当時かなり広く読まれていたらしい。ミットフォードも1906年の再訪の際の見聞記でこの本に触れ「この種の本で、これに匹敵するようなものは滅多に書かれたことがない」（ミットフォード『ミットフォード日本日記』212ページ）と絶賛している。ミットフォードの説明によれば、この本には案内の僧が説明してくれるような「向こうの石の上で義政公は、いつも月の出を眺められたものでした。あちらの石の上に立って春の花の美しさを賞でられたということです」といったそれぞれの名所についてのいわれが網羅されているということである。またチェンバレンは、日本の文化や習慣について事典的に記述した『日本事物誌』（1890）の「首都」の項で、京都について「・・朝廷は七九四年、京都に落ち着いた。そして、この都市は、ほとんど中断することもなく、一八六八年まで代々の帝の住居として続いた。その年に、都は京都から東京に移った。・・しかし京都は、今でも名前だけは首都の地位を保っている。それは東京（東の都）を対比して、西京（西の都）という新しい名前によって示されている。・・京都の市内或いは近くの主要な名所は、帝の宮殿（御所）、寺院の西本願寺、知恩院、清水寺、祇園、銀閣寺、金閣寺、東本願寺、三十三間堂、稲荷神社、比叡山、琵琶湖、桜の花や紅葉で有名な嵐山、桂川の急流（保津川下り）である。錦織や刺繍が普通、京都の主な特産品となっている。次に来るのが陶器、磁器、七宝焼、青銅製品である」（チェンバレン1巻104ページ）と述べている。彼が挙げた名所と特産品を見れば、すでに京都が古い史跡の町、「古い日本」の伝統の町と特徴付けられつつあったことが分かるであろう。

ロチは別として、日本文化に理解を示したベルツ、サトウ、モース、チェンバレンらは共通して「古い日本」の価値を十分に認識し、急速な近代化に危惧の念を持っていた。例えばベルツは、武士道的な教育を受けた日本の大名の子弟の冷静さや礼儀正しさなどに感心する一方、日本人の多く

が昨日までの日本文化を「野蛮」なものとして忘れ去ろうとしていることに危機感を抱いている。緻密な観察と博物学的な客観的記述を心がけてきたモースも、初期の自然科学的な興味を離れて日本の文化に興味を示し、特に消え去りつつある「古い日本」を理解しようと努力した。彼は能や茶の湯に興味を持ち、茶道や謡、弓道などの指導を受けることで自分が大いに魅力を感じている「古い日本」の内側へと入り込もうとしたのである。明治の初期に来日、言語学者として教壇に立つかわら日本各地を旅行し琉球地方にも足を延ばして調査を行うなど、日本の民俗学・言語学に先鞭をつけ四十年にわたって日本の変化を眺めてきたチェンバレンも、1905年の『日本事物誌』の改訂版の序文において、日本の変貌ぶりを「現代日本の過渡期を過ごしてきた者は、不思議なほど年を取ったという気持ちを感じる。というのは、今この現代に住んでいて、自転車とかバチルス（黴菌）とか、勢力範囲とかいう話があたりに充満している中にいる。それと同時に、彼自身は中世時代のことを明瞭に思い浮かべることができるからである。この著者を初めて日本語の神秘の世界へ手引きしてくれた親愛なる老武士は丁髷と両刀をつけていた。・・・彼の現代の後継者は、英語もかなり流暢で、実用向きの上下揃いの洋服を着ている。・・・こんなわけで、一八七三年に日本に着いた筆者は、もう四〇〇歳にもなったような気持ちがして、老人のよく知られた特権・・・を何の苦もなくとるようになるのである」（チェンバレン1巻 8ページ）と述べている。

しかし当時の日本には「伝統」を顧みる余裕はない。西洋の文明に追いつかない限りは、他のアジア諸国と同じく植民地化の危機にさらされるかもしれないという強迫観念が、すべての伝統を否定し、近代化を無条件に正当化していたともいえよう。それどころか伝統的な日本文化を賞賛し「日本人はそのままの姿であってほしいと願う人びとの中にも、実際のところ、あらゆるものを変えるように強く勧めない人はいない」（チェンバレン1巻12ページ）だったのである。そのような状況を目の当たりにしては「いや、古い日本は死んだのである。亡骸を処理する作法は唯一つ、それを埋葬することである。・・・著者は繰り返し言いたい。古い日本は死んで去ってしまった。そして、その代わりに若い日本の世の中になったと」（チェンバレン1巻14ページ）述べざるをえなかったであろう。

しかし彼らは、自らは近代文明の恩恵を十分に受けていながら、なぜ日本の急激な「近代」化にそこまで抵抗するのであろうか。実はそれは日本人にとっての問題であったというより、欧米人自身の問題であったとも考えられる。歴史学者ホブズボームによれば十九世紀末から第一次世界大戦までの三、四十年間は、西欧諸国において特にナショナリズムが高まり、その中核をなす民族的アイデンティティが強く求められた時代であったらしい。そのような強い願望に応じて、民族の特性をはっきりイメージさせるような「伝統」が必要となったのである。スコットランドのタータンチェックやキルトなども、そのようにして搜し出され、作り上げられた「創られた伝統」であるという。自らのアイデンティティの根拠として「伝統」を求めようとしている欧米人にとって、みすみす「伝統」を捨て去ろうとしている日本人は奇妙なものにみえた可能性がある。さらに日本の伝統的な文化、いわゆる「古い日本」を理想化することで、それとは異なる西洋近代文明への批判を正当化していたとも考えられる。そこには彼らが西洋近代文明に対して日頃感じてきた漠然とした閉

塞感や不信感、絶望感といったものが現れていたのではなかろうか。

中でも特にその傾向が強いと思われるのがチェンバレンの友人でもあったラフカディオ・ハーンである。明治二十年代には先に述べたような人々によって書かれた日本紹介の書籍などで日本文化に魅力を感じた人々が来日するようになったが、ハーンもそのような人物のひとりであった。1890年に日本を訪れ、語学教師として松江に赴任した後に東京へ戻り、当地で亡くなっている。ハーンが京都を訪れたのは1894年の平安遷都1100年の記念祭の機会、当然旅行の一番の目的は、京都千年の歴史を表した時代行列であった。その他に京都でハーンが訪れたのは、仙洞御所の庭園、夜店、自らが「勇子」という小品で描いた女性の墓などである。

日本の様々な事象についてのハーンの観察は、物事の表面にとどまることなく、常にその背後にある精神性へとさかのぼろうとする。例えば仙洞御所の庭園では造園法に日本人の自然への感性を読み込んで感激し、夜店を回れば日本の娯楽の特性に考察が及び、それを「はかなさ」にあると分析する。このような推測は確かに当たっている場合もあるが、単に日本の文化を紹介していると見せかけて、実は彼の願望がそこに滑り込んでいる可能性も否定できない。ハーンはあくまでも「古い日本」のイメージを追及し、今日の変化を憎むほどであった。しかしそのような彼の日本理解には、明らかに西欧文明の批判の裏返しとしての日本礼賛が含まれていたのである。

### 3 明治後期の京都観光

明治四十年代にはいると京都には各種の観光施設やアトラクションが現れ、外国人旅行者たちを容易に楽しませることができるようになる。すでに鉄道が開通し、外国人向けの宿泊施設や食堂などが増えることで観光を支える基盤は整っていた。例えばハーンも京都で外国人向けのレストランに入っているが、このような外来者の食習慣に合わせた施設の存在も観光化の一つの指標といえるであろう。さらにこの時期の外国人旅行者たちは、あらかじめ数々の日本紹介の本や旅行案内を手に入れ、そこに書かれた「古い日本」を体験する期待を胸に京都を訪れる。そこで受け入れる京都の側も、外国人旅行者が期待どおりの「古い日本」を効率的に手軽に体験できるように「伝統文化」のショーケースを整えることになるのである。したがってそこで示される「伝統」は人工的な文化保護の制度、つまり「観光空間」でのみ継承されることになる。訪問者側の事前の学習と、このような「観光空間」の誕生によって、外国人「旅行者」は外国人「観光客」になったといえるであろう。

この時期に京都の観光化を、過去との比較のもとにはっきり述べているのはミットフォードであろう。「マクドナルド大使は、彼の偉大な先輩が危うく死ぬ所だった現場を、愛用のコダックで写した」（ミットフォード『ミットフォード日本日記』 138ページ）とか、「現在の新しい日本しか知らない人にとって、昔ここにいた者なら、この古い都でいまだに見ることができる、その神聖で神秘的な栄えある姿を理解することは難しい。いや到底不可能であろう」（ミットフォード『ミットフォード日本日記』 185ページ）、あるいは「一番大きい変化の見られた場所は京都であった。ミカドは、その宮殿のある神聖な御所から去られた。・・寺のヴェールは引き裂かれ、神秘に包まれたもろもろは、打ち倒された幽霊のように霧となって消えてしまった」（ミットフォード『ミット

田 中 ま り

『フォード日本日記』 187ページ) と述べて、かつて政治の重要な舞台であり、活気ある都市だった京都がすっかり博物館化しているのを嘆いている。

かつて彼をあれほど感激させた御所も今では単なる観光名所にすぎない。中に案内されても「過ぎ去った日に我々が迎えられた、謁見の間がどれであったか、見分けるのは幾らか難し」(ミットフォード『ミットフォード日本日記』 193ページ) く、彼の視線はともすれば目の前の御所を離れ回想へ向かう。「<御所さま>への二度目の訪問ほど、私の興味を惹いたものはなかった。その壮大さと豪華さにおいて、京都の宮殿は東京の宮殿に比ぶべくもない。簡素であることが、その第一の特徴で、宮殿がお住まいとして使われていた頃、我々一同に与えた効果をよく覚えている。・・・その技術にはけげんさや、見せかけだけのものや、俗悪なものは何一つなかった。すべてが落ち着いていて、威厳があり、王者にふさわしかった」(ミットフォード『ミットフォード日本日記』 194ページ) という調子である。

しかしミットフォードも、彼が随行したイギリス王子への歓迎会の一環として歌舞練場で催された日舞の舞台に対しては「一口で言えば、これは長い習練を経て感性の極致に達した技芸の特別な展示会である。教養ある日本人が大切にするのは、この完成された技芸である」(ミットフォード『ミットフォード日本日記』 201ページ) と絶賛している。ミットフォードはこの踊りの中に、かつての古き良き日本を感じさせる教養と精神を見出すのである。しかしこのアトラクションは、必ずしも「教養ある日本人」のためのものではない。特別の場合とはいえ、イギリス王子歓迎の意を込めた演目や英文プログラムまで用意されていることから、これが外国人の視線を十分意識した「伝統」の演出であることが分かる。たしかに筋が分かりにくく結末も納得しがたい芝居などに比べて、このような舞踊アトラクションは欧米人に好まれたのかもしれない。ミットフォードとほぼ同時期に日本を訪れたドイツの印象主義作家ダウテンダイも、妻への手紙や旅行の印象記の中でこの「都踊り」と思われる「桜の踊り」に感激している。

このように古い伝統を観光化する一方で、急激な近代化をとげようとしている日本に外国人観光客は失望する。「私はギオン寺へ歩いて行っただが、その建物のいたるところに西洋式の「改良」が施されているのを見てショックだった。ああ、古き良き日本よ。このように日本人が西洋化を勧めていくのなら、旅行者はいったい何を書き残したらいいのだろう」(ゴードン・スミス 342ページ) という嘆きは、たしかに「古い日本」を高く評価してのことではあるだろうが、故郷の同胞に語ることでできるような珍しい「見るべきもの」がなくなるという少々身勝手な不満ともとれるであろう。

外国人が描いた明治期の日本像を今日の我々が見ると、すべての伝統を否定する性急な近代化が危険であるのは明白であるように思われ、かつての日本人がそれに気付かなかったことの方が奇異に感じられる。しかし世界史の流れの中でその構図を見直すと、そのような見方が後付けのものであり、我々がすでに「近代」を体験してしまった側から、つまり当時の欧米人に近い立場から見ていたためであることが分かる。確かに当時の日本には急ぐべきだと感じる理由が十分にあったのであり、実際急ぐ必要もあったのである。一方外国人の側にも「伝統」を擁護しなくてはならない理

由があった。彼らは「近代化」のネガティブな面を体験したために、すでに「近代」に不信感を持って「伝統」に回帰しつつあった上、ナショナリズムの高まりと共に凝集力のある「伝統」を求めなくてはならなくなっていた。つまり彼らが描く日本像には彼ら自身が抱える問題が逆に浮かび上がってくるのである。

今日の我々は百年前の外国人と同じ地点から自らをふりかえることができるようになっている。最近近代の誤謬に気づき、民族的アイデンティティの拠り所となるような「伝統」への回帰を促し、日本の「伝統」や「古いもの」、江戸時代の生活習慣や教育方法を見直す言説もよく見られる。しかしその「伝統」は果たして本物であるのか、創られたとすればどのように創られたのか、なぜそれを捨て去らなくてはならなかったのか、といった考察なしに、「伝統」であることをすなわちその事象の正当化の理由とするのであれば、それは「伝統」のイデオロギー化に過ぎないのではないと思われる。

#### 参考文献

- アーリ・加太訳：観光のまなざしー現代社会におけるレジャーと旅行 東京 1995年  
オールコック・山口訳：大君の都 東京 1962年  
バード・高梨訳：日本奥地紀行 東京 2000年  
ベルツ・菅沼訳：ベルツの日記 東京 1952/53 年  
チェンバレン・高梨訳：日本事物誌 1、2 東京 1969年  
Dauthendey, Max: Die gefluegelte Erde. Ein Lied der Liebe und der Wnder um sieben Meere. Muenchen 1910  
Dauthendey, Max: Die acht Gesichter am Biwasee. Muenchen 1973  
Dauthendey, Max: Sieben Meere nahmen mich auf; ein Lebensbild mit Dokumente aus dem Nachlass und 19 Abbildungen. Hrsg. von Hermann Gerstner Muenchen 1987  
フォーチュン・三宅訳：幕末日本探訪記 東京 1997年  
ゴードン＝スミス・荒俣他訳：ニッポン仰天日記 東京 1993年  
グリフス・山下訳：明治日本体験記 東京 1984年  
橋本和也：観光人類学の戦略ー文化の売り方・売られ方 東京 1999年  
ホブズボウム／レンジャー編・前川他訳：創られた伝統 東京 1992年  
ハワード・島津訳：明治日本見聞録ー英国家庭教師婦人の回想 東京 1999年  
石井研堂：明治事物起源 3、4、5、7、8 巻 東京 1997年  
神崎宣武：三三九度 東京 2001年  
柏木他編：異文化の交流 大阪 1996年  
小泉八雲：明治日本の面影 東京 1990年  
小泉八雲：日本の心 東京 1990年  
レシュブルク・林／林訳：旅行の進化論 東京 1999年  
ロティ・村上他訳：秋の日本 東京 1942年

田 中 ま り

- ミットフォード・長岡訳：英国外交官の見た幕末維新 東京 1998年  
ミットフォード・長岡訳：ミットフォード日本日記 東京 2001年  
モース・石川訳：日本その日その日 1、2、3 東京 1971年  
大河内朋子：ダウテンダイ『ビワ湖八景』における日本像について 所収 三重大学人文学部文化  
学科研究紀要 第17号（2000）、15-25ページ  
大久保喬樹：見出だされた「日本」ーロチからレヴィ＝ストロースまで 東京 2001年  
ローゼンストーン・杉田／吉田訳：ハーン、モース、グリフィスの日本 東京 1999年  
サトウ・坂田訳：一外交官の見た明治維新 東京 1960年  
サトウ・庄田訳：日本旅行日記 1、2 東京 1992年  
ジーボルト・斉藤訳：江戸参府紀行 東京 1967年  
山上 徹：京都観光学 京都 2000年  
山口昌男：文化と両義性 東京 1975年  
山下晋司：バリー観光人類学のレッスン 東京 1999年